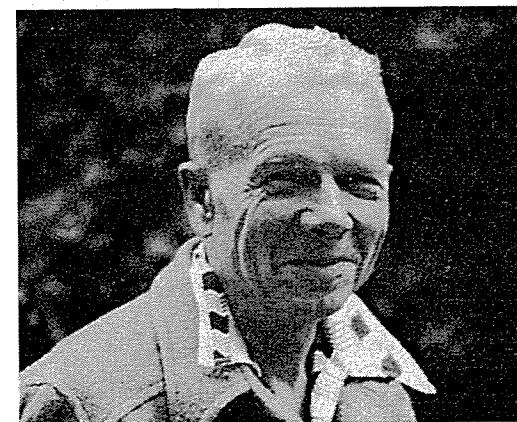


Dwight L. Bolinger — 思想と業績*

八 幡 成 人

Dwight L. Bolinger は1907年アメリカ合衆国カンザス州トペカ (Topeka) に生まれる。1930年ウォッシュバーン大学 (Washburn College) から学士号を、1932年カンザス大学 (the University of Kansas) より修士号を、1936年ウイスクンシン大学 (the University of Wisconsin) より博士号を取得した。1964年にはウォッシュバーン大学より名誉文学博士号が授与されている。1963年にハーバード大学 (Harvard University) に移籍する以前には、ウイスクンシン大学、カンザスシティー・ジュニアカレッジ (the Junior College of Kansas City), ウォッシュバーン大学、南カリフォルニア大学 (the University of Southern California) で教鞭をとった。1973年にハーバード大学を退官後は、



カリフォルニア州パロ・アルト (正確には 2718 Ramona Street, Palo Alto, Calif. 94306) で研究及び著作に専念しておられる。現在はハーバード大学ロマンス語・ロマンス文学名誉教授、スタンフォード大学言語学客員名誉教授の地位にある。またアメリカ合衆国芸術・科学アカデミー (American Academy of Arts and Sciences) 会員、ハスキンス研究所 (Haskins Laboratories), 行動科学高等研究センター (the Center for Advanced Study in the Behavioral Sciences) の研究員でもある。博士は言語学のみならず教育学においても1960年アメリカ現代言語協会 (the Modern Language Association of America) が出版した Modern Spanish の運営委員会調整者として活躍された。1972年には、アメリカ言語学会 (The Linguistic Society of America, 通称 LSA) の会長を務め、1975年から1976年にかけてカナダ・アメリカ合衆国言語学協会 (the Linguistic Association of Canada and the United States, 通称 LACUS) の会長を務めておられる。1979年4月には the Northeast Conference Award for Distinguished Service and Leadership in the Foreign Language Teaching Profession という賞をうけられるなど、現在なおもアメリカ言語学界の長老として御活躍である。

博士の御名前について触れておこう。Bolinger の発音に関しては御家族の間でも論争の種のように、博士自身が好んで使われるのは [báləndʒə], 息子さん (Bruce) が使われるのが [bóliŋə], 博士の伯父様は [bóləndʒə] と発音されるそうであるが、博士御自身も日常は気づかれない異同であるとのことであった。(personal communication, May 28, 1980)。

* 本稿執筆にあたって Bolinger 博士より種々の貴重な資料、及び御教示をいただいた。記して感謝したい。しかし不備な点は全て未熟な筆者の責任である。

L. R. Waugh and C. H. van Schooneveld (1980) は Bolinger 博士への記念論文集で、世界の音声学からの招待論文集であるが、その扉には「本書をアメリカ言語学者の中にあつて最も独創的、創造力に満ちあふれた人物の一人、我々の友人であり同僚である、Dwight L. Bolinger に捧げる」とあり、博士の業績として次の7点をあげている。①「数十年の研究生活にわたって、我々のイントネーション及びプロンディ理解に大変大きな貢献をした」 ②「偏狭な理論を超越した能力は幅広い視野へ導いた」 ③「言語の複雑多様性を決して忘れることがなかった」 ④「氏の研究は形態と意味といった中心的問題と同様言語のふちの部分までも鋭くえぐった」 ⑤「種々の理念を持つ学者達に対して常に反論を提出してその理論の正当性を問いつめ刺激を与えた」 ⑥「尽きることのない創造力は常に言語学界に新たな足跡を残した」 ⑦「氏のヒューマニズムと研究業績は多くの後進へのよい刺激となるであろう」 ①に関しては、この記念論文集を詳細に検討してみると、いかに博士の音声学者としての業績の大きいかということに改めて驚かされることであろう。博士の最も力を注いでこられた研究分野である。②博士は近年のめざましい発展を遂げた言語学の諸理論のどの派にも属することなく、不偏不党の立場から冷静なそして鋭い批評眼で各派を見つめられた。博士にとって今の所、どの理論にも優れた面があるが「Another blind man is describing the elephant.」に終わっているのだという。言語学者がめくらだというのではなく、「言語」そのものがあまりにも巨大な存在なのだという。それほどに言語の世界は複雑なものなのである(③)。博士はともすれば理論に走ってしまいかく見すごされがちであった語法の問題にも鋭くメスをふるわれた。博士の研究によってどれだけ多くの語のベールがぬがされたかその数ははかり知れない(④)。⑤については博士は確かに論争をやりすぎる所があつて(例えば Paul Postal との間に展開された論争はまだ記憶に新しい)、実際それを Bolinger 博士の大きな弱点と考えている学者もいるが、これはそれほど複雑多様な言語の世界に一步でも深く足を踏み入れようとして悪戦苦闘しておられる結果の表われと、好意的に解釈したい。ずっと一匹狼を守り通してこられた博士が LSA や LACUS の会長を務められたことは、とりもなおさず博士の言語学界への impact がいかに強烈なものであつたかを物語るものであろう(⑥)。Bolinger 博士の数多い著作のリストは現在の所1962年までのものがあるだけだが、本論では1980年10月現在までの最新著作目録を作成して Appendix とした。これを見ても博士ほど数多くの論文・著書を発表している「productive」な学者は全世界にも例がないのではないか、と思われる。わが国でも博士の御指導をうけている学者は相当な数にのぼるものと推測される(ちなみにこの記念論文集の巻頭論文は安倍勇氏のそれである)。ここでは以上①～⑦の中から、筆者が最も関心を寄せている④を中心に Bolinger 博士の思想をさぐってみた。

Bolinger 博士の統語・意味論における最も重要なテーマの一つに、「意味と形は一対一対応を

(1) *Aspects of Language* p.552.

(2) 例えば Jacobs (1979)。

成し、形が違えば意味にも違いがあり、意味が違えば形にも違いがある」という「one meaning, one form」の原則があり、数多くの論文及び単行本 (*That's That; The Phrasal Verb in English; Meaning and Form* など) において実証されているのであるが、ここでは具体例として構文の面におけるそれを *drown* と *be drowned* により、語い面を *lately* と *recently* の対比によって考えてみたい。

drown/be drowned わが国の学習参考書の大半が *drown* に対して「*drown* を自動詞として使うのは普通ではなく、通例他動詞としてそれも受動態で使われる」といった現実の語法を反映しない解説を与えていることはすでに指摘されているので(河上道生『英語参考書の誤りを正す』pp.49-50) 繰り返さないが、結論だけ言えば「水死する」という意味ではアメリカ英語において通例自動詞の *drown* を使うのである。

- (1) He had suggested the story to his editor, who had turned it down despite evidence that two people had drowned from inexperience and unfamiliarity with scuba equipment.

—— P. Benchley, *The Island*.

このことは今度改訂された『新英和大辞典』にも書いてないが、最新の『小学館英和中辞典』には「この意味では *be drowned* が普通とされていたが(米)では *v.i.* が好まれる」と明記された。ところで *drown* と *be drowned* の間に意味の相違を見る学者達がいて、例えば Copperud (1980: 114) は *drown* は事故死、*be drowned* は殺人を暗に意味するという大ワクを示しながらも、実際には *drown* = *be drowned* となることもしばしばあることわっている。

さて Bolinger 博士は *Meaning and Form*, p.16 において次の例を対比しながら

- (2) He stupidly drowned; why couldn't he have been more careful ?
 (3) ?He was stupidly drowned; why couldn't he have been more careful ?

(3)がおかしいのは受身形は元来責任が動作主以外にあるものという点に求める。従って、非は彼自身以外にあるという受身形を用いた前半部分と、なぜもっと注意しなかったのかという彼を責める後半部分が相容れないためと考えるのである。(4)ならば全く容認可能となる。

- (4) He was stupidly drowned; why couldn't they have fenced off the safe area so he could have told how far to venture out ?

同様に He inhaled water and consequently was drowned. はおかしく響くことになる。*be drowned* が殺人にまで発展するかどうかは文脈を待たねばならないが、*drown* と *be drowned* の相違を受身形の特質より導き出された responsibility の有無という点から考えることは有益と思われる。受身形を使うからにはそれなりの機能を果たしているはずである。安易に *drown* = *be drowned* といった結論を出すわけにはいかないことがお判りいただけよう。

lately / recently 英米の辞典を引くと lately = recently という図式が出来上がっており、我々もうっかりそれで片づけてしまいがちである。八幡(1980)では Stock(1973)、McCoard(1978)らの諸説を採用しながら、両語は統語的にも意味的にも守備範囲を異にすることを明らかにした。詳細はさておくとして、そこで確認した両語の基本義は次の通りであった。



実はあの論文を書く前に Bolinger 博士より貴重なデータをいただいていたのであるが、スペースの関係で十分に生かすことができなかつたという事情もあるので、ここに紹介してみたい。

『小学館英和中辞典』は現在出版されている学習辞典の中で群を抜いて優れたものと思われるが、その lately の項には「通例現在完了時制または過去時制の文で用いる」(下線筆者)とある。ところが現実には Lately he went to America. は語法上容認されないのであって、この注記は誤解を招きやすい。なぜこの文は敬遠されるのか。

過去形と共起する例が(5)であるが、lately の位置に注意したい。(6)は認められないのである。

(5) I've been after John not^{to} eat so many candy bars. When lately he bought ten of them I scolded him and took them away from him.

(6) ...*When he bought ten of them lately I scolded him...

肯定文の文頭に来た例が(7)―(9)である。

(7) Lately I've had only steak.

(8) Lately he seems to think that all I have to do is wait on him.

(9) Lately they've been getting letters from everywhere.

文頭に来る副詞がアクセントのない文末にも来ることができるように

(10) Tomorrow I expect to see JOHN.

(11) I expect to see JOHN tomorrow.

lately もアクセントのない文末に位置することができる。

(12) They've been getting letters from everywhere, lately.

(13) John hasn't been around at all, has he ? —— Oh, you must be wrong !

I'm SURE I've seen him around here lately.

アクセントのある文頭及びアクセントのない文末の他に、ある条件の下ではアクセントのある文中にも位置できる。

(14) John hasn't been in Palo Alto for at least a year. If he had been around here lately he would have seen some changes.

(15) Everything you did earlier was wrong; what you've been doing lately is at least an improvement.

(16) They've taken lately to standing up till all hours.

(17) Has John been around at all ? —— Yes, I've seen him lately, once or twice.
(この場合 once or twice がないと容認度は落ちる)

さらには lately は疑問文・否定文に起こりやすい (特に(英)) という特質もある。

こうした種々の制約を説明するためには前図のように recently は "at some particular time in the recent past" を lately は "within a span of time embracing a recent period" を基本義と考えるのが一番よいように思われる。即ちこう考えることによって recently が過去形と非常に共起しやすいという事実をうまく説明することができる。lately が何故完了形と共起しやすく、過去形とは問題が起こるかということも解決する。また行為の setting を与える文頭を lately は好みやすいことも、逆に意味的に precise なものを要求する文末には文頭に比べて起こりにくいことも lately のこの意義から導き出せる。以前との対比という点からも lately の否定文に共起しやすいことを理解できよう。earlier, before, formerly などの対語として用いられるのである。また疑問文と共起しやすいことは、人に質問する時はより正確な情報は相手がうめてくれるものと予期して発話するものであるから、意味的に広い守備範囲を持った lately の方が一点に限定される recently よりも好まれるから、と考えることができる。従って何気なく尋ねる文としては(18)はおかしいのであって(19)でなくてはならない：

(18) ? Did you see John recently. ?

(19) Have you seen John lately ?

lately と recently といった身近な副詞をとってみても興味深い事実は尽きないようである。

このように言語の複雑多様性を実証して見せられる Bolinger 博士が、変形文法家の一部に見られるような機械的変形操作によって全てを片づけようとする態度に対して、真正面から挑戦状をたたきつけられるのはもっともなことであろう。例えば能動形に Passive Transformation を操作して出来たものが受身形であり両者は同じものとして考えるのは明らかに誤っている。両者は明らかに守備領域を異にしている。次の例を対比されたい。

(20) George turned the pages.

(21) The pages were turned by George.

受身を「被動作主 (patient) が何らかの形で行為により影響を受ける」と考える時、(21)は明らかにページそのものにも影響が及んでいるが、次の例ではそうではないから非文となる。曲がり角は何の変化も受けないのである。

(22) George turned the corner.

(3) 受動態を談話の流れの中で機能的にとらえて考察したものに安井(1979)がある。

(23) *The corner was turned by George.

ところがマラソンレースか何かである特定の曲り角が目的意識を持って見られた場合には、(24)のような文も可能になってくる。

(24) That corner hasn't been turned yet.

(25)(26)に示すような文脈が与えられるならばやはり容認可能になるが

(25) A: Well, boys, we've turned the corner.

B: What does he mean, 'we'? The corner was turned by George.

(26) (事故又は犯罪事実調査の段階で)

A: Now, Mrs. Brown, you say that just before you heard the shot you saw someone turn the corner at the end of the street. Can you say who that someone was?

B: Yes, it was George Scott.

A: Mrs. Brown, you know that another witness has testified that it was not George Scott, but his brother Ralph ——— that they heard the shot just after they say Ralph turned the corner.

B: No, it wasn't Ralph. It was George. The corner was turned by George.

Bolinger 博士は、言葉の世界を研究する場合に(22)(23)の対比に見られるような grammatical なレベルのみならず、(24)(25)(26)に見られるような stylistic なレベル(emphasis, highlighting, focus, style などを含む)までも考察の対象に入れるべきであることを数多い著作の中で一貫して主張しておられるのである。もちろん博士は変形文法を全面から否定しているわけではなく、同文法が grammatical なレベルにのみ固執して stylistic な面を余りにも軽視して(初期理論では無視といってもよい)機械的変形に走りすぎることに行き過ぎがあると攻撃の矢を向けているのである(5)もちろん変形文法家からは、最初から grammatical/stylistic 両レベルの分析は無理だから grammatical レベルの大ワクの分析をまず済ませてから、微細な stylistic レベルの分析へと進んでいくべきだという反論が予想されるが、この論争は平行線をたどり結局は立場の相違ということになるか。博士は変形文法で発見された言語事実、及び言語の創造的な面をとらえた規則の有用性は十分評価しながらも、言語現象を規則の組み合わせ、組み変えによって全て説明しようとする変形生成文法的アプローチに強い疑念を投ぜられる。人間の記憶の容量は想像を絶するほどに大きいのであって(脳細胞の数は300億もあり、それぞれが他細胞と結合し、中には6万回も結合するものもいくつかある)、その記憶に頼る複雑多様な言語現象を規則でとらえようとする必ず無理が生ずることを種々の論文の中で明らかにした。予測を許さないイディオムの側面が必ずある(博士はこれを a gross statistical tendency と呼ぶ)ということである。博士は新しい理論が提出されると、必ずといっていいほど、その理論でとらえきれない側面を正

(4) (25)(26)の用例は Hymes (1978: 179-180) より。

(5) Vestergaard (1974) は Bolinger のアプローチではこの両者のレベルを明確に区別していないと批判しているが、博士の主張は stylistic レベルも grammatical レベル同様考察の対象に入れるべきということであるから、この批判は現在の所あっていないように思われる。

しく指摘し、博士自身の言語観を明らかにしてきた(6)ところが、そのような博士の姿勢を評して「Bolinger には自分の文法というものがない」と痛切な批評を加える学者も多いが、筆者にはこれは見当はずれの批判のように思われる。確かに Bolinger 博士には Chomsky のような文法はない。博士はこう考える。「言語研究を進める上で特定の理論的ワク組みに縛られなければ効果をあげることはできないのか」答えは否である。種々の理論の長所を生かしながら価値ある言語事実を積み上げていくことによって言語研究を進めようとする(氏はこれを language of observation と呼ぶ)、そして将来言語事実の出揃った段階で大きな一つの理論を構築することが可能かもしれない、今の所はわからないことがあまりにも多すぎる。これによって博士はどんな理論的バイアスに染まることもなく中立の立場から一匹狼として言語現象に鋭い観察を続けてきた。言語の観察 (attention to language) と具体的事実の尊重 (respect for concrete evidence)こそ博士の真骨頂である。

Bolinger 博士のどの著作一つとってみても我々が圧倒されるのは、豊富なデータとその処理に際してのとらえがたきをとらえるあの研ぎすまされた語感である。いかなる理論の下でも博士の提出するデータはそれ自体が貴重であり興味深いものである。ところがその大半は博士の内省に基づくものであり、扱う領域そのものが微妙な場合には、その容認度の判定にぐらつきが見られることがある。博士の著作の書評者の多くがデータ判定に疑義を提出しているのも無理からぬことといえる。個人の内省にはやはり限界があるのであって、それを補う意味で、特に微妙なニュアンスを扱う場合、ロンドン学派の用いる elicitation test などを使う必要が生じてくる。博士も somebody と someone の相違分析にあたってはこの手法を用いておられる。この豊富なデータを肉づけるものが博士の酔わせるような文体である。「Bolinger の英文は、理論的武装がないのに読みづらいと言われる。読みづらいとしたら、それは理論的武装の有無によるのではなく、該博な知識と巧まざる比喩と健全な批評眼を基調とした自由闊達な舌の滑りによる」(中右実)のであって、博士は名文家なのである。

Bolinger 博士の筆まめなことは有名であって、私なども学生時代 Aspects of Language を読んでいてどうしてもわからない箇所がありミスプリントの修正などを書き添えて質問した所、わざわざ丁寧な御解答をいただき、おまけに関係の書物までお送り下さったのであった。学問もかじりたての見ず知らずの一学生が、あの大言語学者の博士から御返信をいただいたのであるから、その時の嬉しきと云ったら想像を絶するものがある。以来何度博士の御手紙の恩恵に浴したことであろうか。博士のもとに世界各国から届く私信は全てきちんとファイルして保存してある。博士の温厚な御人柄と几帳面な御性格は、博士からいただく御手紙のいたる所に見てとることができる。Randolph Quirk が博士を Roman Jakobson と並び称して最大級の賛辞をおくったのも、博士の言語研究に注がれた熱情と、後進への温かい愛情の目があったからに他ならない。一日でも長く博士の御指導を受けられる日の続くことをただただ祈るのみである。

(6) 例えばイディオム研究において、1974年(部分的には1972年) F. J. Newmeyer が「M¹-M²仮説」(名称は筆者)という画期的な理論を提出したが、Bolinger 博士はその有用性は認めながらも、この仮説ではとらえきれない面を正しく指摘された。詳細については Yawata (1977) を参照。

REFERENCES :

- 安倍 勇 (1980) 「コンクリートの壁の中で」『東京工大クロニクル』No. 122, 4.
- Abe, I. and T. Kanekiyo (eds.) (1965) *Forms of English : Accent, Morpheme, Order*. Tokyo : Hokuou Publishing Company.
- Allerton, D.J. (1970) "Review of *Aspects of Language*," *Journal of Linguistics* 6, 125-129.
- Allerton, D.J. (1978) "Review of *Aspects of Language*²," *Journal of Linguistics* 14, 321-323.
- Copperud, R.H. (1980) *American Usage and Style : The Consensus*. New York : Van Nostrand Reinhold Company.
- Hill, A.A. (1969) "Review of *The Phrasal Verb in English*," *American Speech* 44, 210-215.
- Huddleston, R. (1975) "Review of *Degree Words; That's That*," *Journal of Linguistics* 11, 316-319.
- Hymes, D. (1978) "Review of *Meaning and Form*," *Lingua* 45, 175-183.
- Jacobs, R.A. (1979) "Review of *Meaning and Form*," *Journal of English Linguistics* 13, 86-93.
- Johansson, S. (1975) "Review of *The Phrasal Verb in English*," *Linguistics* 152, 78-90.
- Kastovsky, D. (1976) "Intensification and Semantic Analysis : Some Notes on Bolinger's *Degree Words*," *Foundation of Language* 14, 377-398.
- Kubičková, H. (1976) "Review of *Aspects of Language*²," *Philologia Pragensis* 19, 211-213.
- 国広哲弥 (1976) 「書評 *Aspects of Language*」『英語青年』7, 33-34.
- Lepschy, G. (1979) "Review of *Degree Words*," *Romance Philology* 32, 411-415.
- McCoard, R.W. (1978) *The English Perfect : Tense-Choice and Pragmatic Inferences*. Amsterdam : North-Holland.
- 南出康世 (1973) 「*Degree Words*」『英語教育』7, 96.
- 村田勇三郎 (1978) 「*Meaning and Form*」『英語教育』2, 95.
- 中右 実 (1978) 「*Meaning and Form*」『英語青年』3, 43.
- Robins, R.H. (1970) "Review of *Aspects of Language*," *Lingua* 24, 392-393.
- Stock, R. (1973) "On *recently* and *lately*," *Studies in the Linguistic Sciences* (University of Illinois) 3, 231-248.
- Strang, B. (1978) "Review of *Meaning and Form*," *Journal of Linguistics* 14, 347-352.
- Vestergaard, T. (1974) "Review of *The Phrasal Verb in English*," *English Studies* 55, 303-308.
- Waugh, L.R. and C.H. van Schooneveld (eds.) (1980) *The Melody of Language Intonation and Prosody*. Baltimore : University Park Press.
- 安井 稔 (1979) 「英語の受動文について」『筑波大学文芸言語学系紀要 — 文芸言語研究・言語編』1-30.
- Yawata, S. (1977) "A Study of English Idioms : Some Problems in the Analysis of English Idioms," Unpublished paper.
- 八幡成人 (1980) 「LATELYとRECENTLYは同義か」『英語教育』2, 74-77.

APPENDIX : Bibliography of Dwight Bolinger

1. "The Living Language," *Words* [Los Angeles], September 1937 to October 1940.
2. "Spanish on the Air in Wisconsin," *Modern Language Journal*, 18 (1934), 217-221.
3. "Profanity and Social Sanction," *American Speech*, 13 (1938), 153-154.
4. "Glass," *Fortnightly*, December 1938, pp.702-712.
5. "Victorian Styles in Fertilizer," *Commonwealth*, 4, August 1938, 19-20. Reprinted in *Magazine Digest*, January 1939.
6. "Profits on Flesh and Blood," *Commonwealth*, 5, December 1939, 19-21.
7. "Word Affinities," *American Speech*, 15 (1940), 62-73.
8. "A Reconsideration of *As* and *So*," *English Journal* (in College Edition only), 28 (1939), 56-58.
9. "Different — Comparative Degree ?" *English Journal* (in College Edition only), 28 (1939), 480-481.
10. "Must we Use Fewer Words ?" *Better English*, October 1939, pp.39-41.
11. "How Do You Use Data ?" *Better English*, April 1940, p.167.
12. "A Leaf from Your Thesaurus," *The Amateur Writer*, December 1939, p.15.
13. "The Great American Lottery," *The Writer's Forum*, March 1940, pp.27-29.
14. "Verbal Rarities," *Words*, March 1937, pp.58-59; October 1937, p.163; May 1939, p.77.
15. "Victory for Gadget," *Words*, November 1937, p.179.
16. "Whence the A in 'Kind of A'," *Words*, February 1938, p.32.
17. "Our Migratory Adverbs," *Words*, April 1938, pp.62-63.
18. "Distinguish Between *Infer* and *Imply*," *Words*, November 1938, p.118.
19. "In Defense of the Purists," *Correct English*, September 1939, p.
20. "Bozo," *American Speech*, 14 (1939), 238-239.
21. "The Unspoken Language," *The Writer's Forum*, May 1940, pp.14-15.
22. "Press and Profundity," *The Writer's Forum*, September 1940, pp.14-15.
23. "Ambrose Bierce and *All of*," *College English*, 2 (1940), 69-70.
24. "Trivia," *American Speech* 15 (1940), 332-333.
25. "Churchianity, Churchanity;" "Trojan Horse," *American Speech* 15 (1940), 452; 453-454.
26. "Apposite and Opposite," *The Writer's Forum*, January 1941, pp.18-19.
27. "Neologisms," *American Speech*, 16 (1941), 64-67.
28. "Heroes and Hamlets : The Protagonists of Baroja's Novels," *Hispania*, 24 (1941) 91-94.
29. "Plurals and Collectives," *Words*, March 1941, pp.15-16.
30. *What is Freedom ? For the Individual — for Society ?* Norman, Oklahoma, Cooperative Books, 1941.

31. "Whoming," *Words*, September 1941, p.70.
32. "Battle of the Matics," *Word Study* 17, No.2 (1941), 7.
33. *The Symbolism of Music*, Yellow Spring, Ohio, Antioch Press, 1941.
34. "Is Our Religion Spineless?" *Christian Century*, 58 (1941), 1614.
35. "Need, Auxiliary." *College English*, 4 (1942), 62-65.
36. "About Those Exchnages," *Journal of Higher Education*, 13 (1942), 438-440.
37. "Toward a New Conception of Grammar," *Modern Language Journal*, 27 (1943), 170-174.
38. "The Position of the Adverb in English : A Convenient Analogy to the Position of Adjective in Spanish," *Hispania* 26 (1943), 191-192.
39. "Son of Something," *Hispania*, 26 (1943), 184.
40. "Split Infinitive," *Word Study*, 19, No.3 (1944), 4-5.
41. "Purpose with *Por* and *Para*," *Modern Language Journal*, 28 (1944), 15-21.
42. "More on *Ser* and *Estar*," *Modern Language Journal*, 28 (1944), 233-238.
43. "The Case of the Disappearing Grammar," *Hispania*, 27 (1944), 372-381.
44. "New Words and Meanings," *Britanica Book of the Year*, 1944, 769-770.
45. "Corina Rodriguez : Impressions of Isthmian Politics," *New Mexico Quarterly Review*, 14 (1944), 389-402.
46. "Neuter *Todo* , Substantive," *Hispania*, 28 (1945), 78-80.
47. "Note on the Volitional Future," *Notes and Queries*, 188 (1945), 121-123.
48. "Inhibited and Uninhibited Stress," *Quarterly Journal of Speech*, 31 (1945), 202-207.
49. "Universal Military Training," *American Association of University Professors Bulletin*, 31 (1945), 97-102.
50. "The Minimizing Downskip," *American Speech*, 20 (1945), 40-45.
51. "Spanish Intonation," (Review of Tomás Navarro, *Manual de Entonación Española*) *American Speech*, 20 (1945), 128-130.
52. "Famous Coincidences of Science," *American Journal of Pharmacy*, December 1945, pp.431-435.
53. "*Qué tanto, Qué tan*," *Hispanic Review* , 14 (1946), 167-169.
54. "The Intonation of Quoted Questions," *Quarterly Journal of Speech*, 32 (1946), 197-202.
55. "Thoughts on *Yep* and *Nope*," *American Speech*, 21 (1946), 90-95.
56. "The Future and Conditional of Probability," *Hispania*, 29 (1946), 363-375.
57. "Visual Morphemes," *Language*, 22 (1946), 333-340.
58. "Spanish *Parece Que* Again," *Language*, 22 (1946), 359-360.
59. "Analogical Correlatives of *Than*," *American Speech*, 21 (1946), 199-202.
60. "Transformación Inglesa de Dos Balabras Españolas," *América Comercial*, 1.1 (1947), 16.
61. "Still More on *Ser* and *Estar*," *Hispania*, 30 (1947), 361-367.

62. "American English Intonation," *American Speech*, 22 (1947), 134-136.
63. "Comments on Pike's *The Intonation of American English*," *Studies in Linguistics*, 5 (1947), 69-78.
64. "Spanish Inflection," (Review of Robert A.Hall's article, "Studies in Linguistics," *Hispania*, 28 (1945), 582-583.
65. "Dictionaries Hate To Give Offense," *Correct English*, November 1947, pp.39-40.
66. "More on the Present Tense in English," *Language*, 23 (1947), 434-436.
67. "On Defining the Morpheme," *Word*, 4 (1948), 18-23.
68. "The Intonation of Accosting Questions," *English Studies*, 29 (1948), 109-114.
69. "1464 Identical Cognates in English and Spanish," *Hispania*, 31 (1948), 271-279.
70. *Intensive Spanish*. Philadelphia, Russell Press, 1948.
71. "*Fifth Column* Marches On," *American Speech*, 19 (1944), 47-49.
72. "There's Gold in Them There Sewers," *Progressive*, August 1949, p.27.
73. "Discontinuity of the Spanish Conjunctive Pronoun," *Language*, 25 (1949), 253-260.
74. "The Indivisibility of Tolerance," *American Association of University Professors Bulletin*, 35 (1949), 661-664.
75. "Intonation and Analysis," *Word*, 5 (1949), 248-254.
76. "The Comparison of Inequality in Spanish," *Language*, 26 (1950), 28-62.
77. "*Shivaree* and tje Phonestheme," *American Speech*, 25 (1950), 134-135.
78. "The *What* and the *Way*," *Language Learning*, 2:3 (1949), 86-88.
79. "Complementation Should Complement," *Studies in Linguistics*, 8 (1950), 29-39.
80. "Retained Objects in Spanish," *Hispania*, 33 (1950), 237-239.
81. "Rime, Assonance, and Morpheme Analysis," *Word*, 6 (1950), 349-350.
82. "*En Efecto* Does Not Mean *In Fact*," *Hispania*, 33 (1950), 349-350.
83. "Are We Playing Fair with Our Students Linguistically?" *Hispania*, 34 (1951), 131-136.
84. Review of Ricardo J.Alfaro, *Diccionario de Anglicismos*. *Hispania*, 33 (1950), 284-286.
85. "Evidence on X," *Hispania*, 35 (1952), 49-63.
86. "Intonation : Levels Versus Configurations," *Word*, 7 (1951), 199-210.
87. "The Pronunciation of X and Puristic Anti-Purism," *Hispania*, 35 (1952), 442-444.
88. "*Ser Bien*," *Hispania*, 35 (1952), 474-475.
89. "Linear Modification," *Publications of the Modern Language Association of America*, 67 (1952), 1117-1144.
90. "Addenda to the Comparison of Inequality in Spanish," *Language*, 29 (1953), 62-66.
91. " . . . And Should Thereby Be Judged," *Books Abroad*, 27 (1953), 129-132.
92. "The Life and Death of Words," *American Scholar*, 22 (1953), 323-335.
93. Review of Anna Granville Hatcher, *Modern English Word-Formation and Neo-Latin*. *Word*, 9 (1953), 83-85.
94. "Verbs of Being," *Hispania*, 36 (1953), 343-345.

95. "The Sign Is Not Arbitrary," *BICC*, (Homenaje a Restrepo), 5 (1949), 52-62.
96. "Verbs of Emotion," *Hispania*, 36 (1953), 459-461.
97. Review of Salvador Fernández Ramírez, *Gramática Española. Romance Philology*, 7 (1953), 209-215.
98. "Articles in Old Familiar Places," *Hispania*, 37 (1954), 79-82.
99. "Retooling Retrospect," *Modern Language Journal*, 38 (1954), 113-117.
100. "Next and Last," *American Speech*, 28 (1953), 232-233.
101. "English Prosodic Stress and Spanish Sentence Order," *Hispania*, 37 (1954), 152-156.
102. "Education Trend : A Spanish Boom," *Los Angeles Times*, May 30, 1954, Editorial page.
103. "Identity, Similarity, and Difference," *Litera*, 1 (1954), 5-16.
104. "Who Is Intellectually Free ?" *Journal of Higher Education*, 25 (1954), 464-468.
105. Review of James E. Iannucci, *Lexical Number in Spanish Nouns. Romance Philology*, 8 (1954), 111-117.
106. "Prescriptive Statements and Mallo's Anglicisms," *Hispania*, 38 (1955), 76-78.
107. "The Melody of Language," *Modern Language Forum*, 40 (1955), 19-30.
108. "The Relative Importance of Grammatical Items," *Hispania*, 38 (1955), 261-264.
109. "More on Prescribers and Describers," *Hispania*, 38 (1955), 309-311.
110. "Intersections of Stress and Intonation," *Word*, 11 (1955), 195-203.
111. "Intonation as Stress-Carrier," *Litera*, 2 (1955), 35-40.
112. *Spanish Review Grammar*. New York, Holt, 1956.
113. "Meaningful Word Order in Spanish," *Boletín del Instituto de Filología, Universidad de Chile*, 8 (1954-1955), 45-56.
114. "Stress on Normally Unstressed Elements and *Contestar* Versus *Contestar a*," *Hispania*, 39 (1956), 105-106.
115. "Subjunctive *-ra* and *-se* — Free Variation ?" *Hispania*, 39 (1956), 345-349.
116. Review of Mary Reifer, *Dictionary of New Words. Modern Language Forum*, 41 (1956), 53-55.
117. Review of Daniel M. Crabb, *A Comparative Study of Word Order in Old Spanish and Old French Prose Works. Word*, 12 (1956), 148-151.
118. "Delinquent Parents," *Progressive*, 21 (1957), 10-13.
119. "English Stress : The Interpretation of Strata," *The Study of Sounds, Phonetic Society of Japan*, 295-315, 1957.
120. "Prepositions in English and Spanish," *Hispania*, 40 (1957), 212-214.
121. "Locus versus Class," in *Miscelánea Homenaje a André Martinet*, Canarias, 1957.
122. "Maneuvering for Stress and Intonation," *College Composition and Communication*, 8 (1957), 234-238.
123. Review of M.M. Ramsey and Robert K. Spaulding, *A Textbook of Modern Spanish. Romance Philology*, 11 (1957), 59-64.
124. "Stress and Information," *American Speech*, 33 (1958), 5-20.
125. (With Lous J. Gerstman) "Disjuncture as a Cue to Constructs," *Word*, 13 (1957), 246-255.
126. "On Certain Functions of Accents A and B," *Litera*, 4 (1957), 80-89.
127. "On Intensity as a Qualitative Improvement of Pitch Accent," *Lingua*, 7 (1958), 175-182.
128. "Intonation and Grammar," *Language Learning*, 8:1,2 (1957-1958), 31-38.
129. "Interrogative Structures of American English," *Publications of the American Dialect Society*, 28 (1957).
130. "The President's Corner," *Hispania*, 43 (1960), 85-86, 245-246, 425-426, 579.
131. "To the Father of the Bomb," *Fellowship*, November 1, 1960, p.9.
132. "Gleanings from CLM : Indicative versus Subjunctive in Exclamations," *Hispania*, 42 (1959), 372-373.
133. (With J.D. Bowen, A.M. Brady, E.F. Haden, L. Poston, Jr., N.P. Sacks) *Modern Spanish*. New York, Harcourt Brace, 1960.
134. "Cool Fountain," (Translation of verse "Fonte Frida"), *La Voz*, November 1960, p.3.
135. "The Intonation of 'Received Pronunciation,'" (Review of Maria Schubiger, *English Intonation : Its Form and Function.*) *American Speech*, 34 (1959), 197-201.
136. "A Theory of Pitch Accent in English," *Word*, 14 (1958), 109-149.
137. "Linguistic Science and Linguistic Engineering," *Word*, 16 (1960), 374-391.
138. *Generality, Gradience, and the All-or-none*. 's-Gravenhage, Mouton, 1961.
139. "Algo Más Que Entrenamiento," *Hispania*, 44 (1961), 16-20.
140. "Three Analogies," *Hispania*, 44 (1961), 134-137.
141. "More on Pitfalls in Modern Language Teaching," *School and Society*, 89 (1961), 270-280.
142. "Contrastive Accent and Contrastive Stress," *Language*, 37 (1961), 83-96.
143. "Verbal Evocation," *Lingua*, 10 (1961), 113-127.
144. "Ambassador without Portfolio," *Hispania*, 44 (1961), 692-693.
145. "Syntactic Blends and Other Matters," *Language*, 37 (1961), 366-381.
146. Review of Kenneth Croft, *A Practice Book on English Stress and Intonation. Language Learning* 11:3,4 (1961), 189-195.
147. "'Secondary Stress' in Spanish," *Romance Philology*, 15 (1962), 273-279.
148. Review of J.E. Jurgens Buning and C.H. van Schooneveld, *The Sentence Intonation of Contemporary Standard Russian as a Linguistic Structure. Language*, 38 (1962), 79-84.
149. "A Role for America --- Helpership," *Mankind*.
150. "Ambiguities in Pitch Accent," *Word*, 17 (1961), 309-317.
151. (With Marion Hadapp) "Acento melódico, acento de intensidad," *Boletín de Filología*, (Universidad de Chile), 13 (1961), 33-48.
152. "The Tragedy Must Go On," *American Liberal*, November 1962, p.26.
153. "Reference and Inference : Inceptiveness in the Spanish Preterit," *Hispania*, 46 (1963), 128-135.

154. "It's So Fun," *American Speech*, 38 (1963), 236-240.
155. Review of Donald D. Walsh, *What's What : A List of Useful Terms for the Teacher of Modern Languages*. *Hispania*, 46 (1963), 866.
156. "Where's the Teacher ?" *Denver Post, Contemporary*, October 20, 1963, pp.8-9.
157. "Length, Vowel, Juncture," *Linguistics*, 1 (1963), 5-29.
158. Review of Robert M.W. Dixon, *Linguistic Science and Logic*. *Linguistics*, 1 (1963), 104-112.
159. "The Uniqueness of the Word," *Lingua*, 12 (1963), 113-136.
160. "Around the Edge of Language : Intonation," *Harvard Educational Review*, 34 (1964), 282-296.
161. "Binominals and Pitch Accent," *Lingua*, 11 (1962), 34-44.
162. "Language Is for Speaking," *Harvard Graduate Society for Advanced Study and Research Newsletter*, January 15, 1965, pp.2-5.
163. Review of Charles C. Fries, *Linguistics and Reading*. *Linguistics*, 11 (1965), 57-64.
164. (With Robert Jackson) "Trabajar para," *Hispania*, 48 (1965), 884-886.
165. "The Atomization of Meaning," *Language*, 41 (1965), 555-573.
166. *Forms of English*. Harvard University Press, 1965.
167. "Transformation : Structural Translation," *Acta Linguistica Hafniensia*, 9 (1966), 130-144.
168. "Democracy : the Perversion of Consensus," *Fellowship*, March 1966, pp.10-11.
169. "Adjective Comparison : A Semantic Scale," *Journal of English Linguistics*, 1 (1967), 2-10.
170. Review of Georges Faure, *Recherches sur les caractères et le rôle des éléments musicaux dans la prononciation anglaise*. *Language* 42 (1966), 670-690.
171. "Adjectives in English : Attribution and Predication," *Lingua*, 18 (1967), 1-34.
172. "The Foreign Language Teacher and Linguistics," in Jos. Michel (ed.), *Foreign Language Teaching, an Anthology*. New York, Macmillan, 1967, pp.285-296.
173. "The Imperative in English," in *To Honor Roman Jakobson*. the Hague, Mouton, 1967, pp.335-362.
174. "Among the New Words," (department), *American Speech*, 1941-1944.
175. "A Grammar for Grammars : the Contrastive Structures of English and Spanish," (review), *Romance Philology*, 21 (1967), 186-212.
176. *Aspects of Language*. New York, Harcourt, Brace, and World, Inc., 1968.
177. "Literature Yes, but When ?" *Hispania*, 51 (1968), 118-119.
178. "Intonation as a Universal," in *Proceedings of the Ninth International Congress of Linguists* (Cambridge, Mass., 1962). the Hague, Mouton, 1964, pp.833-848.
179. "The Theorist and the Language Teacher," *Foreign Language Annals*, 2 (1968), 30-41.
180. "Judgments of Grammaticality," *Lingua*, 21 (1968), 34-40.
181. "Entailment and the Meaning of Structures," *Glossa*, 2 (1968), 119-127.
182. "Categories, Features, Attributes," *Brno Studies in English*, 8 (1969), 37-41.
183. "Of Undetermined Nouns and Indeterminate Reflexives," *Romance Philology*, 22 (1969), 484-489.
184. "Apparent Constituents in Surface Structure," *Word*, 23 (1967), 47-56.
185. "Postposed Main Phrases : an English Rule for the Romance Subjunctive," *Canadian Journal of Linguistics*, 14:1 (1968), 3-30.
186. "The Meaning of *Do So*," *Linguistic Inquiry*, 1 (1970), 140-144.
187. "Damned Hyphen," *American Speech*, 42 (1967), 297-299. (Pub. 1970)
188. "Genericness : a 'Linguistic' Universal ?" *Linguistics*, 53 (1969), 5-9.
189. "Modes of Modality in Spanish and English," *Romance Philology*, 23 (1970), 572-580.
190. "The Sound of the Bell," *Kivung*, 2:3 (1969), 2-7.
191. "The Lexical Value of *It*," *Working Papers in Linguistics*, (University of Hawaii) 2:8 (1970), 57-76.
192. "Relative Height," in Pierre Léon (ed.), *Prosodic Feature Analysis*. Montreal, Marcel Didier, 1970, pp.109-127.
193. "Let's Change our Base of Operations," *Modern Language Journal*, 55 (1971), 148-156.
194. "Contrast in Depth of Embedding," *Journal of English Linguistics*, 5 (1971), 29-30.
195. "The Nominal in the Progressive," *Linguistic Inquiry*, 11 (1971), 246-250.
196. "Intensification in English," *Language Sciences* 16, August 1971, 1-5.
197. "Semantic Overloading : A Restudy of the Verb *remind*," *Language*, 47 (1971), 522-547.
198. "A New Functional Linguistic Theory," (review) *American Speech*, 43 (1968), 145-147. (Pub. 1971)
199. *The Phrasal Verb in English*. Cambridge, Harvard University Press, 1971.
200. "What did John Keep the Car that was In ?" *Linguistic Inquiry*, 3 (1972), 109-114.
201. "Adjective Position Again," *Hispania*, 55 (1972), 91-94.
202. "The Influence of Linguistics : Plus and Minus," *TESOL Quarterly*, 6 (1972), 107-120.
203. Review of Hans H. Hartvigson, *On the Intonation and Position of the So-called Sentence Modifiers in Present-Day English*. *Language*, 48 (1972), 454-463.
204. "Corporate Linguistics," *LSA Bulletin*, No.53, June 1972, 12-14.
205. "Accent Is Predictable (If You're a Mind-Reader)," *Language*, 48 (1972), 633-644.
206. *Degree Words*. the Hague, Mouton, 1972.
207. (ed.) *Intonation : Selected Readings*. Harmondsworth, etc., Penguin, 1972.
208. "Das Essenz-Akzidenz-Problem," in Gerhard Nickel (Hrsg.), *Reader zur kontrastiven Linguistik*, Frankfurt am Main, Athenäum Fischer Taschenbuch Verlag, 1972, pp.147-156.
209. *That's That*. the Hague, Mouton, 1972.
210. "The Syntax of *Parecer*," in Albert Valdman (ed.), *Papers in Linguistics and Phonetics to the Memory of Pierre Delattre*. the Hague and Paris, Mouton, 1972, pp.65-76.

211. "A Look at Equations and Cleft Sentences," in Evelyn Scherabon Firchow et al., (eds.), *Studies for Einar Haugen, Presented by Friends and Colleagues*. the Hague and Paris, Mouton, 1972, pp.96-114.
212. "Objective and Subjective : Sentences Without Performatives," *Linguistic Inquiry*, 4 (1973), 414-417.
213. "Truth Is a Linguistic Question," *Language*, 49 (1973), 539-550.
214. "Getting the Words In," in Raven I. McDavid, Jr., and Audrey R. Duckert (eds.), *Lexicography in English*. pp.8-13. Also in *American Speech*, 45 (1970), 78-84.
215. "Ambient It is Meaningful Too," *Journal of Linguistics*, 9 (1973), 261-270.
216. "A Further Note on the Nominal in the Progressive," *Linguistic Inquiry*, 2 (1971), 584-586.
217. "Meaning and Form," *Transactions of the New York Academy of Sciences*, 36 (Series II) (1974), 218-233.
218. "El español para los angloparlantes," *Vórtice* (Stanford University) 1:1 (1974), 82-92.
219. "Do Imperatives," *Journal of English Linguistics*, 8 (1974), 1-5.
220. "Darn, Durn, Down, Doon, Damn," *Verbatim*, 1:1 (1974), 1-2.
221. "John's Easiness to Please," in Gerhard Nickel (ed.), *Special Issue of IRAL on the Occasion of Bertil Malmberg's 80th Birthday*. Heidelberg, Julius Groos Verlag, 1974, pp.17-28.
222. "One Subjunctive or Two ?" *Hispania*, 57 (1974), 462-471.
223. "Essence and Accident : English Analogs of Hispanic *Ser-Estar*," in Braj B. Kachru et al., (eds.) *Issues in Linguistics : Papers in Honor of Henry and Renée Kahane*. Urbana Illinois, University of Illinois Press, 1973, pp.58-69.
224. "Concept and Percept : Two Infinitive Constructions and Their Vicissitudes," in *World Papers in Phonetics : Festschrift for Dr. Onishi's Kiju*. Tokyo, Phonetic Society of Japan, 1974, pp.65-91.
225. "Postscript to Poston on the Article," *Modern Language Journal*, 59 (1975), 181-185.
226. *Aspects of Language*. 2nd edition. New York, Harcourt Brace Jovanovich, Inc., 1975.
227. "A Common-Sense Solution to the Canning-Lid Crisis," *Media and Consumer*, August 1975, p.9.
228. Review of George Steiner, *After Babel*. *Verbatim*, 2:2 (1975), 6.
229. "A Note on *Can* and *Be Able*," *Kritikon Litterarum*, 4 (1975), 71-73.
230. "The In-Group : One and Its Compounds," in Peter A. Reich (ed.), *The Second LACUS Forum*, 1975. Columbia, S.C., Hornbeam, 1976, pp.229-237.
231. "Again---One or Two Subjunctives ?" *Hispania*, 59 (1976), 41-49.
232. Review of Adam Makkai, *Idiom Structure in English*. *Language*, 52 (1976), 238-241.
233. "Ralph Long---1906-1976," *TESOL Quarterly*, 10 (1976), 259-261.
234. "Meaning and Memory," *Forum Linguisticum*, 1 (1976), 1-14.
235. "Gradience in Entailment," *Language Sciences*, 41 (1976), 1-13.
236. "The Price of Language," in Adam and Valerie Makkai (eds.), *The Third LACUS Forum*, 1976. Columbia S.C., Hornbeam, 1977, pp.3-11.
237. "Pronouns and Repeated Nouns," Indiana University Linguistic Club, March 1977.
238. *Meaning and Form*. London and New York, Longman, 1977.
239. "Another Glance at Main Clause Phenomena," *Language*, 53 (1977), 511-519.
240. "Transitivity and Spatiality : the Passive of Prepositional Verbs," in Adam Makkai, Valerie Becker Makkai, and Luigi Heilmann (eds.) *Linguistics at the Crossroads*. Padova, Italy, Liviana Editrice, and Lake Bluff, Illinois, Jupiter Press, 1977, pp.57-78.
241. "Neutrality, Norm, and Bias," Indiana University Linguistic Club, December 1977.
242. "Yes-No Questions Are Not Alternative Questions," in Henry Hiz (ed.), *Questions*. Dordrecht, Reidel, 1978, pp.87-105.
243. "Asking More than One Thing at a Time," in Henry Hiz (ed.), *Questions*. Dordrecht, Reidel, 1978, pp.107-150.
244. "Are You a Sincere H-Dropper ?" *American Speech*, 50 (1975), 313-315.
245. "Intonation Across Languages," in Joseph H. Greenberg (ed.), *Universals of Human Language*. Vol.2, Phonology, Stanford, California, Stanford University Press, 1978, pp.471-524.
246. "Free Will and Determinism in Language : Or, Who Does the Choosing, the Grammar or the Speaker ?" in Margarita Suner (ed.), *Contemporary Studies in Romance Linguistics*. Washington, D.C., Georgetown University Press, 1978, pp.1-17.
247. "Idioms Have Relations," *Forum Linguisticum*, 2 (1977), 157-169.
248. "Passive and Transitivity Again," *Forum Linguisticum*, 3 (1978), 25-28.
249. "A Semantic View of Syntax : Some Verbs that Govern Infinitives," in Mohammed Ali Jazayeri, Edgar C. Polomé, and Werner Winter (eds.), *Linguistic and Literary Studies in Honor of Archibald A. Hill*. Vol.2, Lisse (the Netherlands), Peter de Ridder Press, 1978.
250. "Pronouns in Discourse," in Talmy Givón (ed.) *Syntax and Semantics, Vol. 12 : Discourse and Syntax*. New York, Academic Press, 1979, pp.289-309.
251. "The Jingle Theory of Double *-ing*," in D.J. Allerton, Edward Carney, and David Holdcroft (eds.), *Function and Context in Linguistic Analysis : A Festschrift for William Haas*. Cambridge, Cambridge University Press, 1979, pp. 41-56.
252. (With others) "For Hugo Montero," *Modern Language Journal*, 63 (1979), 243-250.
253. "To Catch a Metaphor : *You* as Norm," *American Speech*, 54 (1979), 194-209.
254. "The Socially-Minded Linguist," *Modern Language Journal*, 63 (1979), 404-407.
255. "Metaphorical Aggression : Bluenoses and Coffin Nails," in James E. Alatis and G. Richard Tucker (eds.) *Language in Public Life*. (Georgetown University Round Table on Languages and Linguistics 1979) Washington, D.C., Georgetown University Press, 1979, pp. 258-271
256. "Fire in a Wooden Stove : On Being Aware in Language," in Leonard Michaels and Christopher Ricks (eds.), *The State of the Language*. Berkeley and Los Angeles, University of California Press, 1980, pp. 379-388.

257. "Couple : An English Dual," in Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik (eds.) *Studies in English Linguistics : For Randolph Quirk*. London, Longman, 1980, pp.30-41.
258. "Intonation and Nature," in Mary LeCron Foster and Stanley Brandes (eds.) *Symbol as Sense*. New York, Academic Press, 1980, pp.9-23.
259. "A Not Impartial Review of a Not Unimpeachable Theory : Some New Adventures of Ungrammaticality," in Roger W.Shuy and Anna Shnukal (eds.) *Language Use and the Uses of Language*. Washington,D.C., Georgetown University Press, 1980, pp.53-67.
260. "The Personhood of *who*," *Studia Linguistica*, 34:1 (1980), 1-6.
261. "Syntactic Diffusion and the Indefinite Article," Indiana University Linguistic Club, 1980.
262. "Accents that Determine Stress," To appear in Mary Key (ed.) *Verbal and Non-verbal Communication*. The Hague, Mouton.
263. "The *go*-Progressive and Auxiliary Formation," To appear in Adam Makkai and Valerie Makkai (eds.) *Festschrift for Charles Hockett*. Lake Bluff, Illinois, Jupiter Press.
264. "Some Intonational Stereotypes," To appear in P.R.Léon and M.Rossi (eds.) *Festschrift for George Faure*.
265. "*Wanna* and Gradience of Auxiliaries," To appear in Robert Austerlitz (ed.) *Festschrift for Hansjakob Seiler*.
266. *Language : The Loaded Weapon*. London, Longman.
267. "Surprise," To appear in Lawrence J.Raphael, Carolyn B. Raphael and Miriam R. Valdovinos (eds.) *Festschrift for Arthur Bronstein*.
268. "Consonance : Evidence from *Wanna* "